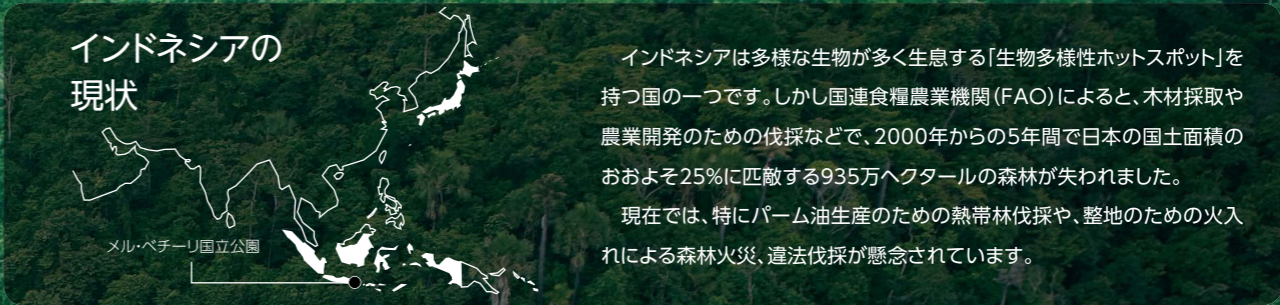


セブン&アイHLDGS.は「REDD」に賛同

国内グループ会社の
 1年間のCO₂排出量の約50%にあたる
 120万トンのCO₂排出抑制効果
 (炭素蓄積量の維持・管理)を目指します

photo ©ITTO/TJ Bruder

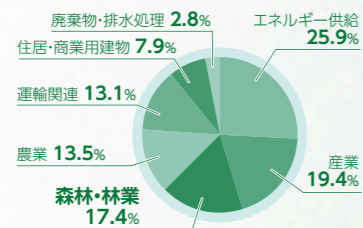


インドネシアは多様な生物が多く生息する「生物多様性ホットスポット」を持つ国の一つです。しかし国連食糧農業機関 (FAO) によると、木材採取や農業開発のための伐採などで、2000年からの5年間で日本の国土面積のおおよそ25%に匹敵する935万ヘクタールの森林が失われました。
 現在では、特にパーム油生産のための熱帯林伐採や、整地のための火入れによる森林火災、違法伐採が懸念されています。

原生熱帯林の保全がもたらす効果

生物多様性にも、地球温暖化対策にも効果的

原生熱帯林には、地球上に生息する動植物の半数が生息していると言われています。豊かな動植物を抱える原生熱帯林ですが、1年間で失われる面積は世界中で1,300万ヘクタールにも及びます。その面積は3年間で日本の面積に相当します。こうした開発による生息地の減少や、乱獲による絶滅、外来種の進入による在来種の変異、気候変動による生息環境の変化を受け、危機に瀕する生物は増えています。



2004年の温室効果ガスの部門別排出源 (出典：IPCC第4次評価報告書統合報告書)

原生熱帯林を保全することは、生物多様性に効果を及ぼすだけではなく、地球温暖化の原因となる温室効果ガスの排出源の約2割は森林破壊です。そのため、原生熱帯林を保全することは地球温暖化の対策としても非常に効果的です。

民間企業として初めてREDDに賛同

世界で注目されている手法をいち早く採用

2009年に開催された気候変動枠組条約第15回締約国会議 (COP15) では途上国における「森林減少・劣化からの温室効果ガスの排出削減 (REDD)」のために、先進6カ国が協調して資金供与することが決定され、森林保全の重要性が世界で広く認められました。

現在も協議が続いているREDDですが、セブン&アイHLDGS.はこの重要性をいち早く認識し、世界の原生熱帯林を保全していく「原生熱帯林保全プログラム」をITTOと締結。そして第一弾となるプロジェクトが、2010年からインドネシアのメル・ベチーリ国立公園で開始されました。これは生物多様性の保全をさらに促進する「REDD」のための熱帯林保全プロジェクトです。これにより、国内グループ会社の1年間のCO₂排出量の約半分にあたる120万トンのCO₂排出抑制効果 (炭素蓄積量の維持・管理) が期待されます。

※熱帯林の多くは原生熱帯林です。

VOICE



ITTO事務局長
 エマヌエル・ゼ・メカ様

REDDは温暖化対策として
 優れた活動です。

このプロジェクトは温室効果ガスの排出量を減らすだけでなく、生物多様性を保全し、周辺住民の生活を持続可能なものにします。セブン&アイHLDGS.の決断は、インドネシアのように熱帯林を持つ国でのREDD事業における民間企業の役割を示しています。セブン&アイHLDGS.に続く民間企業が多く現れることを期待します。

ITTOとは (International Tropical Timber Organization 国際熱帯木材機関)

熱帯林に関する問題を扱う国連の条約機関です。熱帯林の保全及び持続可能な森林経営に関する900件以上のプロジェクトを実施した実績があります。ITTOとセブン&アイグループとの関係は長く、事業会社であるイトーヨーカドーとヨークマートは90年代からITTOに寄付を行い、熱帯雨林の再生プロジェクトを支援していました。

ITTOホームページ：http://www.itto.int/ja/

写真：インドネシア ジャワ島東部の国立公園

プロジェクト地「メル・ベチーリ国立公園」

ホームページ：http://www.merubetiri.com/

インド洋に面した東ジャワ島南部にメル・ベチーリ国立公園があります。面積は約58,000ヘクタールで、豊かな生態系とさまざまな植生があり、原生林も残っています。しかし違法な侵入や伐採により、森林破壊と劣化の危機にさらされています。



公園入り口前の看板。関係者それぞれのロゴが入っています。



生活のために大量の木材が必要とされます

プロジェクトの目的

- ① 国立公園の中とその周辺に住む人々を、森林減少、森林劣化、生物多様性の喪失を防ぐための活動に積極的に参加させることで、住民の意識を向上させ、生活の向上につなげる。
- ② 森林減少・森林劣化による温室効果ガスの排出削減量と、公園内の森林の炭素蓄積量を把握するため、信頼性があるMRV(測定可能・報告可能・検証可能な)システムをつくること。



公園内には人が住む地区もあります

このプロジェクトは、インドネシアの林業省、研究機関、国立公園、NGO、自治体、住民、警察、ITTO、セブン&アイHLDGS.と多くのステークホルダーの協力のもとに進められています。プロジェクトの計画期間である4年間で、「官民共同」「さまざまなステークホルダーの関与」「住民主体」といった項目全てにおいて、メル・ベチーリ国立公園がインドネシアのREDDの模範事業となることを目指しています。



運営委員会では、関係者が集まってプロジェクトについて話し合います

プロジェクトの4カ年計画

- 第一段階 (2010-2011)**
- ステークホルダーが関与する体制を構築
 - 炭素計測のための固定標準値(PSP)の設置とデータ集計

- 移行期 (2011-2012)**
- 第一段階を推し進める
 - 炭素の計算方法を適用する第二段階に向けての準備

- 第二段階 (2012-2013)**
- 住民や官・民といった重要なステークホルダー個々の能力を向上
 - 炭素アセスメントの調査能力を向上
 - 炭素アセスメントやプロジェクトの結果を広く報告

第一段階 (2010-2011)

プロジェクトの成功を左右するのは、住民です。そのため、森を守ることと人々の生活を共存させ、住民がプロジェクト終了後も変わらない行動をとり続けるような仕組みを構築していくことが重要です。現在は、持続可能である新たな収入手段について関係者の間で話し合いが行われています。

住民との話し合い



話し合いの様子

各地域で、住民と関係者が集まり話し合いを行っています。その中では、気候変動が進むとマラリアの発生などが増えるため、森の保全が重要なことを説明。植樹を進めることや、植物から薬をつくるといった伐採行為ではない代替行為から収入を得ていくことなどが提案されています。

住民からは、燃料として使用している木材の量を減らすために、牛を飼ってその糞からバイオマスエネルギーをつくれないう提案や、観光ガイドとして収入を得られるよう若い世代に英語を習わせるのはどうかといった提案がありました。他にも、作物をつくるための知識・方法・技術を得て、生活をより良くしたいといった意見もありました。



薬草から医薬品を開発・販売

住民による活動

植樹はその区域ごとに担当者が決まっています。そのため、住民には自分が責任者であるという意識が芽生えます。植樹以外に、公園から森林警備隊に任命された住民は、違法侵入や違法伐採の監視、公園側への報告など、公園レンジャーの補助的役割を担っています。



森林警備隊による発表

また、植樹場所は住民への教育の場としても利用されています。教科書で公園のことを学んだ小学生が実際に公園に来て、時には保護者と一緒に、植樹を行います。植えた木は子どもと一緒に成長するため、大人にも木の重要性が伝わります。



小学生と一緒に植樹

現在は違法行為の検挙数が年間15件程度ありますが、教育や今後の活動を通じ人々の理解が進むにつれて、ゼロになることが期待されています。

今後の取り組み



ウミガメの放流が体験できます

収入の代替手段として、この国立公園をエコツーリズムとして活かすことや、薬草を使って医薬品を販売していく考えがあります。ほかに、公園のシンボルとして、1997年以降その姿が確認されていないジャワタイガーの調査を再開しようという案もあります。住民が今でも生息していると信じているこのタイガーをプロジェクトの象徴とすることで、国内外から公園への注目が集まり、森の保全がより進展するのではないかと考えからです。こういった意見を検討しながら、次の活動に向けて動き出しています。セブン&アイHLDGS.はこのプロジェクトの一員として、これからも活動を見守っていくとともに、グループの事業と結びつけた支援方法を考えていきます。

VOICE

孫の世代がこの自然を見られる、活用できる森にしていきたいです。

このプロジェクトは、住民から高い期待をされており、それぞれの地域の住民が、それぞれの要望を持っています。それらを理解するのが、公園側の役目でもあります。例えば、公園を観光地として活用すれば、住民にとっては新たな働き先が生まれ、収入につながり、森への依存が少なくなります。住民と協力して、この公園が持つ潜在能力を伸ばしていきたいと思っています。

現在は住民の認識を高めるために、ステークホルダーと協力している段階ですが、3~5年後には住民自身がこの地域を進んで守っているようにさせたいです。この公園を森の保全においても、住民の生活においても、住民主体により進められる優れた先行事例にしていきたいと思っています。



メル・ベチーリ国立公園長
ヘリー・シュパキアティ様